

昭和六十年十一月十五日 ご講演

「二十一世紀を考える」

●講師ご紹介 前川理事長

講師の服部禮次郎先生をご紹介いたします。服部禮次郎先生は服部セイコーの社長さんでいらつしやるわけですが、私は服部先生が実業家というよりも、むしろ非常に文化的な面であるという活躍しておられると考えています。

先生は大正十年にお生まれになって、慶応義塾大学の経済学部をご卒業になり、現在は服部セイコーの社長さんであると同時に、経済同友会の幹事、国民生活審議会の委員等の直接財界関係のみならず、その他東京12チャンネルの審議会の委員長だとか、日本スウェーデン協会の副会長、あるいは日本広告学協会の副会長だとか、青年会議所の活動としては東京青年会議所の理事長をやられ、世界青年会議所の副会長をやられる。諸君も知っているJC活動としては、日本JCの会頭をされ、ロータリーの仕事についても、東京銀座ロータリークラブの会長などをやつていらつしやいます。

先生は、ビジネスマンとして、あるいは財界

活動をなさる以外に、かく内外に幅広く活躍しておられる方であります。

お忙しいところをご無理をお願いして、今日は「二十一世紀を考える」、こういう題でお話をいただきたいと思つております。いつものように八時半で講演会を終わりますが、最後の十五分くらいは諸君との質疑応答、質問があればお答えいただくということにしたいと思います。それでは服部先生お願いいたします。

●服部 ご紹介いただきました服部禮次郎と申します。前川先生からお話をいただきました。皆さんに何かお話をするようにということと同つたわけでございます。

実は私、前川先生からこの和敬塾のお話を伺い、それから、たまたま先ごろテレビで和敬塾の様子が放映されているのを見たりいたしまして、内容の一部分は大体分かつていたつもりなのでありますが、今日こんなに大勢の方と、しかも私がこんなに高い演壇からお話をする

とは実は予期しておりませんで、もう少し皆さま方とひびを交えてお話をするような場かと思つたのでございます。それにいたしましたも、どのようなお話をしたらよろしいか、実は模索をしながらこちらへ伺つたのであります。

私が「二十一世紀を考える」という題を掲げましたのも私の模索の一端でありまして、このごろ、いろいろと「二十一世紀を語る座談会」とか、あるいは「二十一世紀に向けて」という言葉が、雑誌の論文ですとか、あるいはテレビの番組等にちらほら出るようになっております。こちらの和敬塾でお催しになる講演会の中にも、昨年の何月かでしたか、広中先生が「二十一世紀に生きる諸君へ」という題で講演をなさつておられたのも拝見いたしました。

このごろ二十一世紀ということをよく言うのでありますが、そのときに言われますのは、もう二十世紀もあと十五年ほどになった、十五年ほどたつといよいよ二十一世紀になる。二十一世紀はどういう世紀であるかという問いか

けをするのでありますが、多くの場合には、それは、「二十一世紀の入り口論」というのでしようか、十五年から二十年たつて二十一世紀に入ったときに世の中はどうなっているだろうか、科学技術の進歩はどこまで行くだろうか。あるいはまたそれに影響されて、あるいはそれに影響しつつ社会の構造、国際政治の図式はどうなっているだろうか。いわば未来の予見というような形で二十一世紀のことが言われるのであります。しかし考えてみますと、二十一世紀というのは西暦二〇〇一年に始まって、それから二一〇〇年までの百年間を言うわけです。従つて二十一世紀を語るといふことは、単にこれから十年、二十年、三十年先がどうなるかといふことではなくて、十五年先から百年間で人類は一体何を獲得し何を失うだろうか、そしてその総決算が紀元二二〇〇年に行われたときに、そのバランスシートはどうなっているだろうか、そのアセットはどうなっているか、つまり財産目録はどうなっているかといふことを予見することですから、いわば百十五年先のことを百年という物差しで測つて考えていく、これが二十一世紀論であります。

といひますのは、我々が一日単位という物差しで未来を語り出すときは、明日一日はどうなるのだろうか、明日一日はどうやって過ごそうか、どうなつて明日は一日暮れていくだろうか

と考えるときに、当然、それでは昨日一日はどうやって過ごしたかという一日単位で考えます。あるいはまた現在の今日一日、これはどういふふうになつて終わつていくのだろうかといふことを考え、そして明日一日を考えるわけです。であるとするならば、二十一世紀を考えるとこのことは百年の物差しで未来を考えることでもありますから、それでは我々のいる一日単位でいへば、今日に当たる現在の世紀、現在我々がいる二十世紀といふのはどういふ百年間であつたか、これがそろそろ終わりにかけていけるけれども、どうやって終わつていくのだろうかといふことを考える。あるいは振り返つて言うならば、十九世紀といふ百年間はどういふ世紀であつたかといふことを考えて、百年単位でものを考えませんと、二十一世紀といふ百年の単位の予測なり、あるいは計画なりができないのではないかと考えるのであります。

ただいま一日単位でものを考えるところとを申しましたが、一日単位とか、あるいは一年単位といふのは、これは意味のある区切りであります、人為的な区切りではなくてごく自然な区切りであります。

朝、夜が明けてから一日がたつて夕方になり、夜がふけて、そして夜を経て翌朝までというのが一日であります。あるいは真夜中から真夜中までを一日とする、区切り目はいろいろありま

す。二十四時間というのは天体の運行、それによつて影響を受ける我々の体のリズム、あるいはまた生活のリズムの単位ですから、ごく自然な区切りであります。もつとも現在、夜中の十二時といふのか零時といふのか、それが一日の区切り目になつております。昔の日本は明け方が一日の始まりで、それから翌日までが一日であります。ですから昔の本といひますか、徳川時代あるいはそれ以前の記録を見ますと、時々我々が間違えることがある。あるいはどちらだか分からなくなることがあります。何年何月に大地震があつたとか、あるいは変な話ですが、人の命日、何々といふ人は何年何月何日に死んだといふのが出ております。その場合には、午前三時ぐらいにそのことが起きると、現在ですとそれは翌日の分といふとおかしいけれども、一日(ついたち)の朝午前三時という、当然それは一日のことになります、昔の計算の方法でいいますと、まだ一日になつていない、三十日であつたりするといふことで、計算を間違える、記録を間違えることがあります。いずれにしても一日といふのは一つの意味のある区切りであります。

それから一年といふ単位、三百六十五日ですか、あるいは端数がつくか分かりませんが、これも天体の運行から割り出された一つの周期であります。それに伴つて植物の生長、ことに

農業を基本として生活をしている地域にとつては、一年の経過というのは生産の点からいいましても、あるいはまたそれに伴う経済の営みからいいましても、非常に意味がある。よく勉強をするときに、何ぞ来年を待たんや、と、来年こそ勉強しようなどと言っているひまがあったら、今日からやれということをお願いします。来年から一生懸命やりましようと言ったら、先生が、いやそういう心掛けではいけない、来年からやれるくらいのは今年からやりなさいと言ったという話があります。農業のように年に一回しか収穫のない作物をつくっている場合には、今年ある植物、ある作物を栽培するのに失敗したならば、来年こそは立派なものを育てましょう、今年はどうしようがないけれども、と。これは毎日毎日天然のものを栽培するというわけにはまいりませんから、今年が駄目だったら来年があるさといつて、来年に向けて努力するより仕方がないわけです。従つて一年を三百六十五日を単位として計画を立て、自分の行動の評価を一年という単位で見据えて、将来に向けて努力を展開していくというのはごく自然なことでありませぬ。

これに基づきまして、現在ご承知の通り、国家の予算でも、あるいは会社の会計年度にしても、四月からスタートするか、一月からカレンダーイヤーでスタートするかは別としまして、

一年を単位ということでは区切っているわけでありませぬ。ことにこれはいま申しました農業が基本であつたときの経済の基本であつたのが、世界中ほとんど普遍的であつた時代の、ある意味では遺物であります。政府の収入は、日本でいえば一年に一遍の収穫のお米から税金を取る、農業の収穫から税金を取る。従つて、政府の収入といひますか歳入は一年に一回、それが豊作であるか凶作であるかによつて決定してしまうという、米作の物納を基本としていたときの会計の立て方が、現在、農業収入による収税に対する依存率が著しく減つていけるにもかかわらず、一年を単位として行われているということでありませぬ。いずれにしても、一年一回というのは、季節の変わり目もありますが、世界では年中同じような気候のところもありますから、春夏秋冬のある国では三百六十五日を区切りとするというのは、これまた一日が区切りと同じように意味のある、ごく人為的な自然のことでもあります。

ところが、二十一世紀にしましても、十九世紀にしましても、二十世紀にしましても、百年で長さを区切るというのは全く人為的なことでありませぬ、ある意味では意味がないということか不自然なことでありませぬし、またどこをスタートとして百年を区切つたらよいか。ご承知の通り、西暦を使っているのが現在、世界で普遍

的ではありますが、国によっては回教のカレンダーを使う、あるいは仏教のカレンダーを使う。タイのように仏教のカレンダーで仏暦何年という使い方で年を勘定している国もありますし、また回教国のように回教の暦を使っているところもあります。これによつていつの年に二〇〇〇年とか一九〇〇年とかいうラウンドナンバーに達するかということは違うわけですから、その意味からいっても、どこが区切りかというのはある意味では人為的なことにすぎないわけでありませぬ。しかしながら、やはり時の経過を何かの物差しで計つてながめていくというのは、意味のあることでもあります。

我々は歴史の有限な流れを見る場合に、そしてその傾向をたどつていくときに、大きな政治の転換期をとらえて区切りをつける。例えば日本で申しますと、新しいところでは第二次大戦の終わった時、これが一つの大きな区切りであります。また一九四五年の第二次大戦の終結からまた百年ほどさかのぼりますと、一八六八年の明治維新というのが一つの大きな政治上の区切りであります。それからまたさかのぼつて、一六〇〇年、これがたまたまラウンドナンバーの年であります、いわゆる関ヶ原戦争により、徳川政権確立が決定された年であります。そういうような政変といひますか一つの政治体制への転換で区切りをつけるというのは、皆さん、

西洋史、東洋史、世界史、あるいは地方史、いろいろ勉強なさっているでしょうが、それぞれの範囲の中で政治的な区切り、あるいは大きな戦争とか、そういうことで区切りをつける、その前後で区切りをつけるというのも歴史を把握する一つの方法であることはご承知の通りであります。しかし、今後の未来を考える場合にも、また過去を考える場合にも、そして自己を見つめる場合にも、百年という大きな物差しで時々いろいろなことを眺めて見るということも有意義なことであろうと思います。

そこでご承知の通り二十一世紀は二〇〇一年から始まるのでありまして、二〇〇〇年はまだ二十世紀のほうに入るわけでありまして。日本では世紀の切り替えというのは、明治三十四年すなわち一九〇一年になってから初めて知ったわけです。西洋では世紀末という言葉があるように、世紀の終わりというのは時々いろいろな面が使われていたわけです。十七世紀が終わるときも十八世紀が終わるときも、世紀末と言われたわけですが、日本ではそういう百年の物差しで考えるという思想はなかった。明治のころ、つまり十九世紀が二十世紀になるときに初めて世紀の切り替えということに直面したので、一体どういうところで区切って、どういう意味があるのか、当時のジャーナリズムも、あるいは普通の人もよくわけが分からない。日

本では年号が替わる、あるいは将軍の代替わりをする、朝廷の天皇の代替わりがある、代が替わるかあるいは当事者が替わっていく——政権が足利から何に替わる、北条から何に替わるという区切りとか、あるいは將軍の代替わりがある、天皇の代替わりがある、あるいは年号が替わる。あるいは六十年単位で還暦などと申しまして、また十二と十の掛け合わせで十千十二支というのができているわけですが、六十年周期でもの区切りを考えていたわけですから、明治の半ばに初めて百年の区切りというのに遭遇しまして、一体、二十世紀というのはいつ始まるのだろうか、一八九九年で十九世紀がきつと終わって一九〇〇年から二十世紀になるのだろうか、いやそうじゃない、一九〇一年からが二十世紀だろうということで、二十世紀特集号というのを二年続けて出した雑誌があるそうです。初めのときは間違えて一八九九年にもう世紀が替わったと思った。よく聞いてみたら、そうではない、もう一年先があると翌年また特集号を出したそうであります、そのくらい日本では、世紀という観念はそれまでなかったわけです。

現在我々がいる二十世紀を考えてみますと、まだ八十五年しかたっていないから、あと十五年たつてどんな総決算ができるか分かりませんが、我々のいる現在の、会社でいえば会計年

度では、その中で一人人類は、あるいは日本人は、あるいはもっと狭くすれば我々の所属する各々の団体なり学校なり地域なりは、この百年間で何を果たしたか、何を失ったかということを考えてみたいと思います。

皆さん方は現在、非常に幸福なことに、この和敬塾というところへ入っておられる。三十年の歴史によって優れた先輩がおられて、大勢の先輩を出していらっしゃる。そして私は非常に羨ましく敬服いたしますのは、数十校のいろいろな方々が一緒におられる、あるいは外国の方もおられる。決して同じようなところの地方とか、全部一つの地方から来ているとかいうことではない、いわゆるホモジニアスではなくてヘテロジニアスな構成メンバーになっていらっしゃるということ、これは非常に強い結びつきであり非常に有利なところであると思います。しかし、いくらヘテロジニアスだと申しましても、これまた全然違う、共通点のない、ホモジニアス的なところの全然ない鳥合の集団かと申しますと、皆さんは同じ時代に生を受けて、そして同じレベルの教育を今までずうつと受けておられて、現在も東京という一つのところで地域を同じくして活動しておられる。あるいは所属する大学は違っておられても、同時代の東京の現代の大学教育を受けておられる。その意味で非常に大きな共通性というか同一性、

ホモジェニティを持っておられて、しかもバラエティを持っておられるということは、非常に強いことであると思います。集合的な教育というのは各大学でも行っていますが、こういう和敬塾のような教育の源流というのは一体どういうところにあるのだろうか。あるいは現在、それが比較的少ないと申しますか、和敬塾のような優れた先輩がおられ、優れた指導者がおられ、そして優れた支援家がおられる、こういう恵まれた組織体が比較的少ない。これはまたどういうことであろうかということをおっしゃるさかのぼって考えてみたいと思います。

今からもう六、七十年前になるのでしょうか、大正の初めというか一九一〇年代に、当時、日本の文豪と言われていた森鷗外が小説を書いている。森鷗外の小説というのは現在、皆さん余り読まれておられないのではないかと思うのですが、森鷗外のものをお読みになったことがおありの方はいらっしやいますか？ あつたらちよつと手を挙げて下さい。ありがとうございしました。森鷗外とか漱石とかいうのは古典に属しますから、余り読んでいない方がないかと思つたのですが、相当大勢読んでいらっしやるようです。

森鷗外の小説に『渋江抽斎』という伝記小説、史伝小説があります。これはどういう小説かといひますと、徳川時代や弘前の藩のお医者さん

の伝記を書いていて、その人の子孫のことまで書いてある伝記であります。森鷗外の文学の中では傑作の一つと言われているものですが、その中にたまたまこういうことを書いています。現在は大学、高校、中学、小学校、それぞれ官公市立の学校で行われていて、かつての私塾、プライベートな塾による教育が絶滅している。これでは、いい心の通つた人間形成はできないという人が多い。そしてそういう人たちは何によつてそれを救おうかとするか、昔の家塾を夢見る人が多い。昔の家塾というのは吉田松陰の

「松下村塾」ですとか、緒方洪庵の「適塾」ですとか、そういう優れた指導者のもとに限られた人数の塾生がいて、そこで起居を共にして人間的な切磋琢磨を行う、そういうのが家塾の一つのパターンであります。そういうものの復活を望む人がいる。しかしながら、これはなかなか実現できない。これは大正五年の話です。森鷗外がそれに触れているのは、しかし一方、芸能界を見ると——当時の歌舞伎とか日本音楽の長唄とか謡曲とかいうものを言うのでしょうが、そういうところの修業を見ていると、昔の家塾と変わらない親しい美しい関係が行われている。これはいわゆる高等教育ではないかもしれないけれども、技能の伝達かもしれないけれども、そういうところに美しいものが今でも残っているということに触れている箇所が

あります。

現在は、非常に高等教育が発達して、進学率が高くなっている。女性の進学率もこのところ非常に高い。ここ十五年ぐらいい見ましても、現在、大学の数というのは日本に大体千校ありますが、これが昭和四十年ごろを見ますと、つまり二十年前をとつてみますと五百校もない、四百数十校であります。人数も当然それに比例しているわけでした、高等教育が非常に普及している。ことに女子の進学率が非常に伸びているということがあります。それではいよいよ教育は大量のマス・エデュケーションに移つていつて、心の交流が、この和敬塾のようなのは稀少価値というとおかしいけれども、非常に珍しく感じられるくらい、まれになつていくというのが現状であります。

それでは昔の家塾というのはどういうものであつたか。今世紀の日本にとつて、明治維新以後の近代国家としての日本の再出発というのは、第二次大戦による一時の挫折があつたにせよ、今日まで引き継がれているわけでありませう。時期的にいきますと、一八六八年が一応明治維新のスタートとします。その前のプレ・ヒストリーの時代、新しい時代への胎動の時期、十年十五年の準備期間のようなものがあつたわけですが、仮にそれを入れますと、一八五〇年ごろから今日までの百年余りのところ、ちよ

うどぴったり百年ではありませんが、百数十年という一世紀ちよつとというところで大きな発達をしているわけでありませぬ。この源流となつたものは幾つかあります。一つは明らかに日本が直面した当時の外圧であります。外圧という、ただ受身のプレッシャーのようでありませんが、要するに外国にエクスポージャーしたというのが一つの大きな転換期になつたわけでありませぬ。その時期にできたいわゆる私塾の中には、今ちよつと申しました吉田松陰の「松下村塾」、これは長州（山口県）萩にあつたわけです。もう一つは大坂にできた緒方洪庵による「適塾」であります。皆さんはその時期のことをどのくらいご存じか分かりませぬが、一般的に申しますと吉田松陰というのは非常に国粹的な、今でいうと右翼のような、武道を中心とするやかましく日本精神を強調するような右翼的な塾の感じがします。それから緒方洪庵というのは、当時またキリスト教はもちろん禁じられている、洋学という言葉もあるかないかぐらいで、世間で漢学大流行、儒学大流行の時代に、非常にマイノリティな学課であつた蘭学を中心に教えていた。蘭学塾として、あるいは西洋医学の塾として人材を集めた。これは非常に開明的というのでしょうか、西欧に目を開いた近代的な塾である。吉田松陰のほうはどちらかというとと後ろ向きの感じがするわけです。そ

こで実際にこの二つはどういう塾であつたかということをお話したいと思ひます。

いま日本の近代化は、外からのプレッシャーによつて、あるいは外へのエクスポージャーによつて始まつたと申しました。当時の徳川三百年というのは大体において藩によつて各地が統治されていた。幕府の直轄領というのもありますが、人々は藩を中心にした生活をしている。経済単位も藩が中心、政治の単位も藩が一つのユニットになつている。学問も朱子学が主であります。朱子学の中でどういう系統をその藩が採用しているかということ、その藩の中の学問が決まる。芸術等も大体、藩の奨励庇護、後援、あるいは独占という形で、萩焼きであるとか鍋島焼きであるとか薩摩焼きであるとか、品もしくは産物も、すべて藩単位になつていて、人々はいわゆる藩あるを知つて、日本国あるを知らない。知らないというのは当たり前で、日本国と他の国とを区別して、自分たちは一つだと感じるということは、外と交流していなければ感じるわけではないのですから、日本国というのを意識する必要もないし、感じようもなかつた。

自分一人で生活している場合は、自己ということを感じないわけです。集団で生活をして、

しかも自分と違う人と接したときに、我々は初めて自分というのは何であるかということを感じるわけです。ですから、個人的体験としては、外国へ出る。皆さん方も留学してほかの国へ行く。そうすると初めて自分は何だろうということを感じる。親兄弟と一緒にいただけでは自分というのは何だということは感じない。それと同じように、外へエクスポージャーされなかつた日本は、当時の人々は藩あるを知つて、自分の藩と他の藩との区別は知っておりませぬが、国という観念はなかつた。それが外に、いわゆる鎖国が解けて、外との交流によつて国家意識、国民意識が出てきたわけです。その時代のことですから、緒方洪庵の塾と吉田松陰の塾はちよつとタイプが違うようですが、実は同じ要請というか、同じプレッシャーというか、同じ環境に置かれたということから、できているわけでありませぬ。

緒方洪庵と吉田松陰というのはもちろん会つたことはなかつたでしょうが、年齢が二十歳ほど違うわけです。緒方洪庵のほう年上であります。洪庵が生まれたのは一八一〇年であり、吉田松陰が生まれたのはそれからあとの一八三〇年、天保年間、もう幕末になつてからであります。洪庵は岡山県のいわゆる備中、足守で生まれて、吉田松陰のほうは長州、萩で生まれている。いろいろと違う経歴を経ているよう

すが、洪庵は二十歳のとき、岡山から江戸に留学する。そして更に長崎に留学する。これですっかり長崎を通じて世界の情勢、世界の中における日本というのを身をもって意識するわけであります。そこで医学を中心とする蘭学というのでしょうか、蘭学を基とする医学というのでしょうか、それを勉強してまして、大阪へ出て天保九年、一八三八年に大阪で開業をしながら弟子を取った。この緒方洪庵の塾の中からは長与専齋とかお医者さんも出ますけれども、大村益次郎のような、全く医学と縁のない軍人あるいは政治家になった人、福沢諭吉のように蘭学、洋学のほうへ行つたけれども、これまた全然医者ではない人、そういう人が非常に多く出ているわけです。そして明治のいわゆる文化、あるいは行政というような方面に人材をたくさん送り出しているわけです。

一方、吉田松陰のほうは二十年遅れて生まれていますから、従つて洪庵が江戸へ留学し、続いて長崎に留学していたころは、まだやつと生まれたばかりというとき。それでも結局、二十歳ぐらいで江戸に留学する。そして長崎に行くというのは、同じコースをたどっているのです。ただ松陰の場合には、そこからが洪庵と非常に違うコースへ行くわけであります。これはもうしようがない、ペルリが浦賀へ入ってきた。たちまちそれに乗せてもらつてアメリカに渡ろ

うという決心をして、これは失敗するわけですよ、再びペルリが下田へ来る。またそれに乗せてもらおうというので、今度は、はしけを雇つて船の中まで行くのですが、結局、送り返されてしまう。そこで自首するのですが、これから監禁生活に入つてしまうわけです。監禁生活に入つてしまいますと、どうしても人間がたくなになる。あるいは生活見聞が限定されて、非常にひた向きになってしまつて、今までの非常に凝縮された体験長崎に留学した、アメリカの船とにかく乗り込んだ、そして獄に投ぜられたという、圧縮された体験を非常に激しい勢いで人に対して伝えたくなるといふところで、「松下村塾」に大勢の人材を集めたのであります。

日本にいま非常に大きな外圧がかかっている、日本と世界との関係はどうするか、それに対する対応の仕方はこれしかないということ、後の伊藤博文、山県有朋、久坂玄瑞、山田顕義という明治の政治的指導者あるいは軍事的指導者になるような人に伝えたのであります。松陰が塾を開いていたのは、実際は二年間ぐらいであろう、もっと少ないのでしょうか、一年何カ月というぐらいで、たった八十人の人を教えただけですが、塾生でなくて木戸孝允とか、いわゆる交流をした人はおりますが、それにしても影響した相手は、直接接した人という

のは百人ぐらいなものでありましょう。これが明治の日本、あるいはこの後に対して相当大きな影響を与えているのであります。一方の「塾」のほうは時間的に相当長く続くのですが、その中でいろいろな人を養成して社会に送り出している。全く純粹の医者として一生を地方の診療に送つたような人も送り出していますし、福沢であるとか長与であるとかいう明治の指導者になつたような人も送り出していますし、いろいろな点で後世に影響を与えているわけであります。

これは皆さまの和敬塾から思い起こして申したのでありますが、そういう小さな集団からも非常に大きなエネルギーがほとばしっている。それは今まで濃縮されていた一つの日本人のエネルギーが、どこかの噴射砲からほとばしり出た、その幾つかの例を申し上げているわけです。しかしながら、これらは全体から見ますと組織化された、システム化されたものではなかつたわけです。これが日本の一つの国家を形成する、あるいは文化を推進する、技術を発展させる組織としてでき上がるのは、やはり一八八〇年代、ちやうど今から百年前ぐらいに、皆さんが行つておられるような各種の大学に出そろつたとき、明治十何年というところが日本の中に組織的、学問的、あるいは技術的、文化的なシステムができ上がったところであろうかと

思います。

一昨日でありましたか、私、たまたま中央大学の百年祭の催しにお招きを受けたので行ってまいりました。皆さん方の中に中央のキャンパスへいらした方がおありかもしれませんが、今は八王子に立派なキャンパスができております。これはそもそもどういふふうにしてできた学校かと申しますと、日本で明治の初めに法律制度を一生懸命採り入れる。政府も実定法としての法律を整備しようとする。それから裁判官の養成、弁護士養成、それから法律学校の整備をやったわけですが、そのときに民間の活力として、法律教育あるいは法律研究の一翼を担おうとしてスタートしたのが中央大学であります。これは政府が初めフランス法のナポレオン法典を継受して、日本の法律体系をつくり上げようとしたのに対して、英国系の法律を入れて、日本の裁判所の運営等を純粹のフランス法的ではない方向へ持っていきたいという人たちのつくった学校であります。これに対して、もちろん仏法、独法、英法と長く日本の法律が分かれておりましたように、独法の学校もでき、仏法の学校もできたわけであります。そういうようなものが法律の面だけではなく、各方面に出てきたわけです。そしてようやく今日の日本の大勢の進学希望者を受け入れる大学が出せよう素地が、百年かかってできたのであります。

そのほか現在、我々が何となく平気で使っている、利用している制度とか機関とかいうものも、その芽生えができてから実際に花が開くまでには、すぐ百年ぐらいたつてしまうようなものが多いのであります。

日本は明治維新以来、急速に文明開化、近代国家として成長した。ヨーロッパの各国が二世紀三世紀、すなわち、二百年三百年かかってやったことを、日本は駆け足で百年間、あるいはそれ以下で成し遂げた、あるいは追いついたということが言われております。それにしても、大概のものは促成栽培で一応はできませんが、基礎的なことをやるのは、学問にしましても制度にしましても、百年単位でやると二段階上っていくというものが多くあります。

冒頭に申しましたように、二十一世紀を考えると、あるいは百年単位でものを見ると申しまして、我々のやっていることは、一つのジエネレーションが受け持つというのは三十年とか五十年程度のものであります。そしてまた次のジエネレーションがそれを背負っていくわけですから、仮に三十年を二ジエネレーションとみますと、三代かかってやっと百年の一つの事業というのできていくという計算になるわけです。現在、二十一世紀を語るというときに、特に取り上げられますのは、社会がどう変わっていくか、それを支えていく技術の進歩、

そしてそれを人類がいかに上手に、いかに英知を以ってその進んだ技術を運営していくか、これに対応していくかということが、希望と憂慮とを以ってしばしば語られ、考えられているわけであります。

一例を挙げますと、このごろのバイオテクノロジーの進歩は、誠に驚くべきものがあるわけですが、これまた人類がこれを善用するか、あるいは独り歩きしていく技術に蹴飛ばされるようになるか、ということが論ぜられているわけであります。またハードからソフトへということがよく言われます。ハードウェアの時代からソフトウェアの時代になる、それは確かにその通りであります。しかしそれは一国にとつて、または世界にとつて一体どういう喜びをもたらさし、あるいは憂いをもたらさるのであるうか。世界の各国の中で一番早く、いわゆるハードの面において、すなわち工業力の面において、頂点に達したのはイギリスであります。イギリスが世界の製鉄、世界の鉄鋼の過半数といえますか、大部分を占めるようになったのは、十九世紀の半ば、イギリスが他の諸国に先んじて産業革命を成就したときに、既にその位置に立っているのであります。

しかし、もう一九〇〇年の半ば以後になりますと、イギリスのハードの面における世界支配は、次第次第に下がっていくのであります。鉄

鋼を一つの指標に取りましても、そのシェアは下がっていく。これに取って代わったのは、アメリカであります。しかしながら、アメリカが世界一の鉄鋼生産量を誇り、世界一のエンパイヤー・ステートビルディングを誇っていたときに、既にその王座をアメリカに渡したイギリスはただ衰亡の一途をたどったのであろうかと申しますと、決してそうではない。イギリスは製造業の点ではアメリカに王座を渡しましたが、これはそのエネルギーをハードからソフトのほうへ移しまして、世界的なバンキングであるとか、インシユアランスであるとか、あるいは金融、あるいは情報、すなわち通信網、情報網、ロンドンタイムズによつて象徴されるような世界的な指導的な言論機関、あるいは近年までその力を保っているBBCの海外放送というようなソフトの面において、アメリカのハードの隆盛を横目に見ながら世界を支配していたわけでありませう。外交もしかりであります。やがてそれらのハードがアメリカに移ったとき、アメリカは同時にソフトを握れたか。それは握れなかった。いま申しましたように、イギリスその他のヨーロッパがソフトのほうは握っていた。しかし現在はどうかであるかと申しますとイギリスは既に鉄鋼の王座を降りて、日本とシェアを共にするようになってから久しいものがあります。

しかし、それではアメリカは、パックス・アメリカーナと呼ばれる世界支配の体制からもう落ちてしまったのかと申しますと、これはまたコンピュータのソフトウエアによつて、あるいはパテントの数によつて象徴されますように、ソフトの面で非常に大きな力を持つて、別の意味において世界支配を相変わらず続けているわけがあります。これは通貨の面でもかつてポンドが世界通貨であり続け、そしてまたドルが現在いろいろ言われながらも、しかし世界通貨としてソフトの面で世界を支配しているのが続いているわけでありませう。これらの移り変わりというのは、いわゆる一朝一夕でなく、ほとんど百年を単位として緩やかに、しかも確実に一つの方向へその王座が移動したり、あるいは形がハードからソフトへ転換していくということが、確実に行われているわけでありませう。

我々日本も、やはりそのような大きな時代の流れや、世紀の流れには抗し得ないわけでありまして、ご承知の通り、現象面としては貿易摩擦であるとか、文化摩擦であるとか、いろいろな取り上げられ方をしておりますが、これも転換期にさらされている、我々の持たされているというか負わされている課題であり、問題であるかと思ひます。

冒頭に申し上げましたように、本日は皆さま

のようないろいろな学校にお学びになって、伺うと理工系の方もいらっしやるそうだし、文科系統、これもいろいろな専攻の方がいらっしやるようでありますし、また出身の国もタイ、ブラジル、フィリッピン、イギリス、アメリカ、大勢の方が諸外国からそれぞれ来ておられるそうでもあります。それらの方々がご自分の祖国あるいはご自分のこれからの抱負を持つて次の世紀に向けて活動をなさるところでありますので、私としてはみなさまに対してこれからの活躍、ことに二十一世紀において皆さんが活躍なさることをお祈りいたしまして、お話を終わりたいと存じます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

質疑応答

●司会 それでは質問のお許しをいただいておりますので、質問のある方は手を挙げて。ございませいか。ある方は、所属を言つてからにして下さい。

●大友(西寮・横浜国立大学工学部・三年)講演の内容とは少しはずれるのですが、先生は先程のお話でタイのことにも触れられましたが、私、十二月十八日から外務省とある民間団体でタイの難民キャンプ、ロウエイケン、バンピナイ・キャンプに奉仕団として参加することになったのです。それでいま事前にいろいろな活動

準備をしているのですが、ぜひ難民キャンプに時計を寄付したいと考えております(拍手)。

このような場でこのようなことを願うことはたいへん場違いかもしれませんが、先生のお話にもありましたように、時間を考えて行動する、日々生活をするということはすごく大切なことだと思います(笑)。いま難民キャンプの人々はそのような時間という感覚を持っていませんし、文化や情報に飢えているという現状なので、そういう面でぜひ貢献したいと思っております、先生にお願いしたいのです。

●服部 はい、ありがとうございます。いまタイのごがお話にございましたが、いつからいらっしゃるの？ 私は十二月の初めにタイへ行くのですが、あなたは半ばからですか？

●大友 十二月十八日からです。

●服部 そうですか。それじゃ私はちよっとそれまでではありませんが、タイのお話が出ましたので、私からも宣伝させていただきます。

ご承知の通り、タイは東南アジアに位置しております。文化的にいえばサンスクリット文化を継受しているところですが、小乗仏教も国民の中に非常に定着していて、東南アジアの中では、ある意味でも安定した国だろうと思うのです。ところが国際的な環境というのは、ご承知の通り、南は半島でマレーシアと接しております。ここでも国境でしょっちゅう

いろいろな問題が起きております。南のほうのマレーシアは回教国でありまして、現在はいわゆるブミプトラの政策をとっております。タイとは国策が相当違うわけでありまして、しかもタイとマレーシアのボーダーのところには、タイ側のほうにも回教徒の人がおりますし、逆にマレー側のほうにもタイの人種が入っていて、入り乱れております。何十年というか何百年もその国境争いが続いておりまして、日本が第二次世界大戦中にあの地域で勢力を持つておりましたときには、現在マレーシアに入っているクダ、クランタンという二つの州をイギリスからいわば接収して、タイのほうへくつつけてあげようということをしたこともあります。そっちのほうもなかなか大変な国境問題を持つております。

しかし一番深刻なのは、ご承知の通り、ラオスとの国境、それからカンボジアとの国境であります。ベトナムとは近いけれども境は接してありません。おりませんが、もうカンボジアではありません。バンコックからすぐであります。そしてラオスとは川を隔てているだけですから、メコン川を渡るとすぐラオスであります。向う側に見えていて、普通の人が普通の船で平気で国境を行き来するのを止めることもできない状態であります。大勢の難民がカンボジアからタイのほうへ入ってきました、

その難民自身も非常に気の毒ですが、タイの人と言わされると、自分たちのほうがよっぽど気の毒で、難民のほうには、時計はどうか知りませんが、いろいろ同情して物を、あるいは物心両面、いろいろなヘルプがいくけれども、それに押されている近所のタイの人には、だれも同情をしてくれない、あるいはそこに行ってみればなるほどと思うけれども、外部の人は国際的なアピールをしてもなかなか分かってもらえない。タイのほうは非常に影響を受けて難儀をしていると言っわけです。

このラオスもカンボジアもベトナムも、もともとは同じ国でありましたが、フランスの植民地になったときに、フランス流のいわゆる分割政策によって分かれてしまったわけでありまして。一方、ベトナムの中は南北が昔から、これはもう何百年来、北ベトナムと南ベトナムというのは人種が違うわけですから争っている。これは今いろいろな問題をタイの中に持ち込んでいるわけですから、その難民キャンプというのは難民キャンプの中も問題を抱えているし、これは決してホモジニアスではないわけです。それからまたタイの人のほうにも影響が非常に強く伝わってくるということで、非常に苦労しているところがありますから、これからいらっしゃるといふのはたいへん有意義なことであり、ぜひご活躍をお祈りしております。

私どもで何か少しでもできることがございましたら、喜んでさせていただきます。どうぞ後ほどご連絡下さい。(拍手)

●神屋(北寮・中央大学商学部・一年) よろしくお願いいたします。時代をずうつとさかのぼってみますと、植民地中心の綿工業の時代から鉄鋼業の時代へ、それから現在、ソフト、情報 の 時代 ですが、次の時代はどういうものが主流を占めるようになるとお考えになりますか。そしてそれをぼくたちがリードしていくためには、今どういうことをしていけばよいのかということをお聞かせいただけたらと思います、お願いします。

●服部 たいへん難しいご質問ですが、傾向として、植民地から綿を、いわゆる一次産品を取り寄せて、そして本国で加工して、それをまた植民地に販売するという昔のパターンから、植民地自体において紡績工業が栄えるようになり、あるいは植民地以外の日本のようなところで綿花を入れて加工して紡績工業ができるという三段階を経て、その繊維工業からまた次の少なくとも一次産品に依存しない合成繊維のような繊維工業に転換していく。それは化学工業へまたつながっていくという、工業の中での変化がありながら、そしてまたエレクトロニクスの産業というようになりながらソフトのほうへ移っていくというのは、先程もちよつと申

しましたように現在の傾向であろうと思えます。しかし、これがどうなっていくか、どういう時期にそうなっていくかということは、私も本当に分かりません。

これまた古い話になりますが、明治十七年でありましたか、福沢諭吉が当時『民情一新』という本を書いております。当時、福沢が言っていることは、これからはやはりソフトの時代になるという意味にもなるのですが、現在、世界を動かしているものは四つのことなのだ。一つは蒸気機関である。また内燃機関がないので、すから蒸気機関。蒸気機関というのは、それを利用していろいろな製造工業のことを言っているわけです。もう一つは汽車・汽船だ。汽車・汽船も蒸気の応用であるけれども、単にそのものをつくるというのではなくて、汽車・汽船は人間及び貨物をいろいろなところに運んで、人間の知識を広めていくのだ。ドイツの学校教育の程度を見てみると、鉄道のナレッジが普及すると全く比例して、文盲率が減っている。日本の中も鉄道が広がって文盲が減って知識が広がっていく。そういう意味で鉄道と汽船というのは非常に大きな意味を持っているのだ。もう一つは電信である。電信というのは無線電信ではなくて、恐らく有線の電報のことでしょう。現在、東京から長崎へ一つの情報が達する時間というのは、江戸時代に江戸城か

ら浅草まで一つの伝達を行われるのと同じぐらいに変わってきている。これはこういう電報が普及したならば、政治、行政の形はどんどん変わるに違いない。

それに別の本であります、同じころ彼が言っているのは、現在五十ほど県があるけれども、命令の伝達、情報の収集ということがもつと発達したならば、日本の行政単位は五十の県はいらなくて、二十か、本当は十ぐらいでたくさんだということをおっしゃいました。もつともこのときは人口が四千万ぐらいですから、それはあまり予言にならなかつただろうと思うのです。それからもう一つ挙げているのは、郵便と印刷をいつているのです。蒸気は汽船の中に入れてしまうと四つになるわけです。郵便というのは一つの情報を配るのに同じ値段で——これは千八百四十年かにイギリスで均一料金による国内の郵便制度をつくった。これが、人々がいろいろなことを知り合い知らせ合うのに、非常に大きな役に立っている。もう一つは印刷である。現在ロンドンのデイリー・テレグラフは三十七万部刷っている。一晩のうちに三十七万人、少なくとも三十七万の所帯の人が同じことを知っているようになるというのは、昔では考えられなかつたことである。この汽車・汽船、印刷、電信、そういうものをうまく組み合わせて有効に使った国がこれからの進

歩を担う国になるのだ。まず日本はそれをやれということになるわけですが、それは百年前に言われながら、なかなかその通りにはなっていない。

それではそのときに郵便事業を始めたらいいかということになるわけですが、これはそういう事業も起らなかったし、電信はその後、電話に置き換えられかけたわけですが、つい最近、電電公社がNTTになるまで、あるいはそのちよつと前に日本中に電話が普及するまで、ほとんど五十年間、明治以来塩づけになって進歩しなかつたわけでありませう。鉄道というのはハードとしての普及は見えましたけれども、それがソフトとしてどういう意味があるかという面でもとらえて、鉄道の方向を決めるということをしなかつたわけですね。今日それがようやく分かつてきているわけでありませう。従つてソフトの時代になりました。そのソフトをキャリアーするハードというものは一層必要になるだろうと思つたのです。コンピュータにしましても、コンピュータのハードだけでは駄目と同時に、ソフトだけでも駄目でありませう。皆さん方がこれから担われるのはどの分野に行かれますか、これは一体如何なる意味を持つているのかということをよくお考えになつて、それぞれのものを運営していくということになるだろうと思つた。特に電話がなくなつて何になります

とか、何がなくなつて何になりますかということ、私自身も分かりませうし、また誰も實際は分かつていないのだからと思つた。

●司会 だいぶ時間も過ぎておりますので、まとめてもう二人質問して、同時に答えていただきます。

●山川（学習院大学・経済学部経営学科二年）
こういう言い方をするとたいへん失礼ですが、先程から先生のお話を伺つていますと、さすがに時計屋の社長さんということで、時間や時代に対する考え方というものを非常に納得されているのですが、今後二十一世紀の世界、また社会に対して服部先生または服部セイコー社として、どのように社会に貢献または影響を与えていこうと思つていらつしやるのでしょうか。

●木村（早稲田大学・社会科学部三年）今日の議題では余り触れられることがなかつたのですが、最近アフリカの飢餓に対してすごくいろいろな話題を呼んでいます、この十一月末にぼくはあるところでスピーチをすることになつております。いろいろな本を読んだりしたのですが、二十一世紀というところから日本あるいはアメリカなど先進国では、いろいろなハードウェアからソフトウェアというように進歩していく時代だと思つたのですが、一方、アフリカなどの貧しい国々では、人間が食物がなくて死んでいくという相反する矛盾した状況が起

こつてきています。これをそのまま放つておくのは絶対におかしいことで、二十一世紀になるに当たつて自分たちは、地球的規模で地球を大きな目で考えて、人類全体の福祉を考える時期であると思つたのです。ぼくはいろいろな矛盾にたくさん気が付きました。例えば、米とかいろいろな作物などのプライスを維持するために眠らせておいたり、あるいはアメリカなどではオレンジを捨てたり、そういう余剰作物をアフリカに送る、その SHIPPING・コストなどはバジェットから取つておかれるとか、いろいろな策が考えられると思つたのです。そういう点でまだ学生としての見方ですが、いろいろな矛盾があるのですけれども、それについて服部先生はどうお考えになりますか。

●服部 ありがとうございます。最初のほうのご質問は私、何とも答えかねるのでございませうが、私は事業を一生懸命社員と一緒に経営してまいりたいと思つております。ただ、時計というのはいくつの計器——メジャーリング・インストゥルメントでありまして、時間の流れというか、何分間という経過を計つたり、あるいは何時何分という時刻を表示したりするのが本来の役目でありませうが、ある意味では一つの情報というところ、きざつばいのでありますが、いろいろなものを計つていろいろなものを表示するということの一環でありますから、そういう

意味でいろいろな電子機器のほうの事業も展開しているわけでありまして、社会のお役に立てばと思っております。

それからアフリカの話ですが、いま何でアフリカが飢餓問題に直面しているのだろうかと思しますと、これを百年単位でさかのぼってまいりますと、皆さんは当然アメリカの植民地ができたときのことをお気付きになるだろうと思います。イギリスの植民地というのはあちこちにありました。インドもそうでありますし、いわゆる現在の中近東もその支配下であったわけです。そういう国々におけるイギリスの植民地は、イギリスが相当面倒を見てコントロールをしているわけです。例えばそれは単に軍事とか政治とかというだけではなくて、教育の面でも、あるいは宗教の面でも——宗教というのにはキリスト教ですが、それも本国からいい意味で相当コントロールしながら植民地を統治している。これは搾取と言えるかもしれませんが、それなりに一つのアドミニストレーションを着実にやっていた。しかし、アメリカの場合にはイギリスの政府の人が出掛けて行くというよりは、むしろイギリスの当時のエスタブリッシュメントに反対だった人がぞろぞろ行ったわけです。みんなうちやらかしていたわけです。うちやらかしてあんなに広いところへ行ったのですから、それがアフリカから

たくさん労働者を連れていく要因になって、だれもそれをチェックしなかった。アフリカの労働力に依存して農地を耕していたのはスペイン人もポルトガル人もやっていたのですが、ブラジルの場合などは黒人が入っておりますけれども、それは労働者として入っているのであって、奴隷としては入っていない。奴隷として入っているのは、アメリカの、しかも南部のほうだけあります。そのときに大量に労働者相当質のいい人々がアフリカから脱落してというか、持っていかれてしまって、アフリカが空洞化したというのが、今日のアフリカの悲劇の原因であります。

そのもとのところを考えないで、ただ、いま食糧が足りないから運ばないではないかとやりましたも、それは一回一回食事を届けているだけで、いつまでたってもそこで作物ができるようになるのか、あるいは工業が興るようになるのか、自分でアドミニストレーションのマネジメントができるようになるということにはならない。ただ毎日、気の毒だから三食届けましよう。それはしないよりいいことですが、それではやがてその寿命が尽きて、ただ病人は楽に一生を終わるといっただけになってしまう。アフリカの人々がただ一生を楽に終わって、それでいいのだ、絶えてしまってもいいのだ、というのなら簡単といえますか、それなりの解決は

図れるわけですが、実際はそうでなくて、アフリカ人の生活をどうしたらいいか、アフリカ人の自己教育、自己研修をどうしていったらいいかというのが、基本の問題であろうと思います。それは非常に根深い問題があるわけでした、ただそれだから放っておくというわけにも、もちろんまいらないわけでありまして。相当矛盾を感じることもおっしゃる通りたくさんあります。これもよくご研究になって下さい。ただ単に目前の、非常に気の毒なことに対する正義感というとおかしいけれども、それだけでは解決しない問題だろう。エチオピア一つを取っても痛切にそれが感ぜられることだろうと思います。

余り十分なお答えにならなかったと思しますが、またあとでお話ししましょう。(拍手)
司会 ありがとうございます。たいへん長時間にわたって質疑にお答えいただきました。これで服部先生のご講演を終了させていただきます。一同起立して、拍手で先生をお送りさせていただきます。どうもありがとうございます。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。